

『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考

—京の生活の人間関係と若君の処遇が意味するもの—

松 浦 あ ゆ み

一

『浜松中納言物語』（以下『浜松』と略す）の男主人公中納言が、唐土より帰国してから、唐后転生の夢告を受けるまでの、巻二以降の物語展開については、既に唐后転生へと導く構想上の伏線が明らかにされてきているが、⁽¹⁾その際に、中納言の意思決定は、とかく予言や夢告など絶対的な決定に翻弄されている様に見られがちである。しかし、近年の指摘の通り、予言や夢告も中納言の言動を正当化する手だてと見なし得る。しかも注目すべきなのは一方では中納言の言動で自ずと生じた歪みを正すためにその次の展開が必要になってくるといった面も見られる事である。

本稿では、『浜松』の物語展開を進めるその原動力を見出すにあたって、唐后をめぐる中納言の〈言いつくろい〉を、検討していく。これは、中納言の唐后思慕が唐后の事を語り草にしようとしてはためらい、あるいは言いつくろっている中納言自身の傾向と密接に結び付いている点を明らかにした前稿⁽³⁾を承けて、さらに

考察を押し進めたものでもある。この検討を通じて、とりわけ吉野姫君が唐后の〈ゆかり〉として物語の前面に出ながらも、盗み出されて唐后転生夢告をうける姫君を身ごもる展開に自ずと至らしめたその原動力を明らかにしてみたい。

二

① 尼姫君には、この世の事もかの世の事も残りなく、長き寝覚めに聞こえ尽くひ給中に、河陽県の後の事はかりぞ、心のうちに深く残し給て、菊見給し夕べの御かたち、琴の音ばかりなどは、いみじう聞き所ありて、語り給ふべき物がたりなれど、まづ先に立つ涙につつまれて、え言ひだに出で給はざりけり。
(巻二・二五七頁)⁽⁴⁾

帰国後しばらくしてもなお中納言は、何もかも隔てなく話す大將大君にさえ唐后の事を言い出せないでいる。この葛藤が、中納言の唐后思慕の観念的な性質——大將大君と勤行に励む一見理想的な日常生活の中で唯一満たされぬ感情として凝縮され燃え上

がるという成行きをよく表しているといえよう。この点に注目するならば、中納言のためらい、そしてまた言いつくろいをも、①の後も繰り返す以後の展開は、そのまま中納言の唐后思慕の過程の一面を表しているわけである。以下、まずは中納言のこのような言動の繰り返しに注目し、物語展開を追いつつ諸論を踏まえ、該当場面毎に番号を付して列挙していくことにする。

この中納言の葛藤が、唐后から託された母吉野尼君への文を開くことになり、一度目の吉野行きとなり吉野姫君の登場を導くに至る物語展開の端緒となっていることは、諸論の指摘するところである。実際、大将大君にしばしの暇を告げるのにも、大将大君の尼姿に美しさを覚えてもおお自制できたのも、唐后へ遠く心を奪われているためであろうかという草子地さえ記されているのである(巻二・二六二―二六三頁)。この際の暇乞いが、渡唐のそもその目的だった亡父の転生三の御子から頼まれ吉野聖に会いに行くものとされておき、唐后の依頼の事実は伏せられている。

①「『もうこしよりわたりて侍りし聖に、みこの』伝へよ。たしかに、人づてならで』との給ひし御消息の侍を、吉野山の奥にて待たれば、みづからたづねとらせ侍らんとてなん。立ち帰にもと思侍にし心なれど、かように見たてまつりては、しばしの隔で、うちつけにおぼつかなふおぼえ侍かな。そのほどまぎれなく、御をこなひなどせさせ給へ」と、こまやかに聞えをき給まゝにも、涙のうき給めるを、(巻二・二六二頁)ここでの中納言には、先ほどの①でみられた葛藤と相まって、唐

后にかかわる一切を大将大君から遠ざけておこうとする(配慮)と、渡唐中も恋い続けた相手大将大君への思いやりが、表裏一体となっている。このように言い置いて中納言は、吉野に旅立つわけである。

こうして、思い入れを込めて吉野に着いて、唐后の事を話した相手が吉野尼君である。

②「『もうこしのみこを見たてまつりしゆへ侍りて、はるかにわたりまかり侍りつ、へ中略』今はとてこなたへまかりかへり侍りしほど、河陽県に召しありて、へ中略』よろづへだたり、その御ゆくゑ知らぬが、世にあるかひなく、心憂しい嘆かるゝを、かならず／＼たづねきこえて、この御消息を伝え聞こえさすべきよし、みこも后も、泣く／＼仰せごと侍りしかば、へ以下略」(巻三・二七六頁)

というように、「三の御子と后」の孝養の志として話している。中納言は吉野尼君に文を届け、対面も果たす為に、まず手始めに吉野聖を訪れて「『もうこしの三の宮の御母后、』しらかじかの聖に御消息聞こえしを、いかがなりけん。へ中略』」との給はせて御消息伝へたまへるを、(へ中略)「(巻三・二六五頁)と簡単に用件を伝えただけであり、その結果吉野尼君との対面の際には、唐后の「御けはひに通へる心ちするに、いと涙もとまらず。」(巻三・二七一頁)などと、唐后のイメージを見出し出すまでに感動を覚えていた。しかしながらも、ここで注目されるのは、吉野尼君から唐后の文に「思い棄つまじき」人とあつた中納言との隠し子若君の

ことをたずねられると、唐后付きの女房の子であるかのように、
 ②ありのまゝに知らせてまつるべきならねば、「かの御身に
 も離れざりける人の持給へりしちごの、いとらうたく侍りし
 かば、かの世界にも、殊にたのもしきよすがもなきやうに見
 え給へりしかば。かの宮にも御覧じなれなどして、さ申させ
 給けるにや。さるべからんおりにいてまいらん」

(卷三・二七六頁)

と対面を約して素姓をはぐらかす点なのである。対面の約束も吉
 野から帰ってから「若君をもいかで見せたてまつらまし。おさ
 なき程をとをくいてまうでん、ところせし」(卷三・二八八頁)
 と悩んでいる内に、やがて巻四に入って吉野尼君は往生を遂げて
 しまう。

一方、次に唐后の事を話すことになったのは帝の御前である。

これは唐土の事を話すよう仰せを受けた時唐后を思い浮かべて、

③「中略未央宮の八月十五夜の月の宴の河陽県の後の琴弾
 き給ひしをこそ申し出でめ」と、思より、涙の先に立ちぬべ
 きにつつみて、先々も申しいでで止みにしを、

(卷三・三〇九頁)

という、2節で問題にした巻二の終わりと同様の葛藤をおぼえな
 がらも唐后の事を語り草にしている重要な場面である。

この時点の中納言は、吉野から帰った後で、大式女との密通を
 めぐる一連の事件を経つても大將大君の法華八講を催しており、
 大將一家とは大団円に向かっているといえる。しかし、だからこ

そその晴れがましきにつけても、唐后への思いが激しくなり、卷
 一以来幾度となく回想された一夜の契りの思い出にふけり、「こ
 の世は山陰の春の夢をかぎりにて止みぬるぞかし。」(卷三・三〇
 八頁)とまで思いつめている。

しかしこのような思い入れに比して、話し始められた御前の唐
 語りの結果はどうかと言うと、山陰の一夜の契りの場面は、

④又三月の月かすみ、おもしろう候しに、さんいふといふ所に、
 月見花をもてあそぶところに、人々の中に、いみじうめでた
 き人こそまじりてさぶらひしか。(卷三・三一頁)

この唐語りにおいては、唐后との宿世として回想されるべき他の
 場面とは、月光の中の唐の佳人というイメージで統一されている
 だけで、脈絡がなく、中納言はあたかも唐后とは別人のエピソ
 ドであるかのように言いなしてしまっているのである。

その際持ち出された皇女降嫁の件を、苦慮したあげく大將大君
 にそのまま打ち明ける。しかしその際にも、

④なをつきもせず、隔てそめにしうらみをのみ聞こえ給ひて、
 よろづの事残り無ふ語らひ聞え給を、河陽県の後の御事はか
 りをぞ、なを残り給へる事なる。(卷三・三一七頁)

やはり唐后の事だけは打ち明けないのである。しかも、続いて、

④中將の乳母の預かりの若君の事をも「夢のやうにただ一目見
 し人の許にかかる人なんあると聞きて中略」とて忍びつ
 つ見せたてまつり給ひけり。(卷三・三一七頁)

というように、またしても若君の存在を明かし対面させてはいる

ものの、その際母親たる唐後の素姓は曖昧に言いつくろつてゐる。そしてそればかりか、巻四に入つては大將大君にさき話してゐない唐後の事を吉野姫君に話してゐるのである。

以上①から④までを追つて行くと、つまりは大將大君から吉野姫君へと物語展開の中心が移つていく、周知の通りの流れといえそうである。だが、その打ち明ける相手が、大將大君でも吉野姫君でも帝でもなく、吉野姫君でなければならなかつた物語展開の必然性は中納言の唐后思慕の傾向として考えられるのではないか。本稿では吉野姫君そのものを検討する前に、まずはそれまでの①②③④の過程、それも唐後のことの聞き手として組上に乗せられたその相手——吉野姫君は後述することにしてとりあえず大將大君と帝の反応を中心にして先行作品と比較しつつ、検討してみることとする。

三

大將大君は、①のように、中納言がそもそも唐後の事を語り草にして聞かせようと思つた女君であり、それは、日本での体験も唐土での体験をも「長き覺覚めに聞こえ尽くひ給ふ」、つまり「夜もただ御座を並べて、昔今の事もをかき尽くし、泣きても笑ひても聞こえ尽くし給ひ」(巻二・二五四頁)という、肉体関係ぬきで隠し隔てのない信頼を素地にしたものであつたことは明らかである。事実大將大君に対しては唐后関係以外の出来事なら、各々の事件が起つた直後に自分のやむを得ない窮状を打ち明け事

『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考

を収めるといふ展開が見られるのである。皇女降嫁事件の場合は、巻四巻頭で少將の内侍を介して遠回しに辞退することによつて解決されているから、直接はこのパターンに当てはまらないが、注目すべきなのは、話の持ち上がった巻三の時点で、すぐさま降嫁の仰せがあつた旨大將大君に打ち明けているのであり、この時点で既に、『源氏』若菜上巻での葛藤つまり紫の上には何も告げず光源氏が女三宮降嫁を承諾する成行きとは決定的な異なりを見せているといえる。

だが、その隠し隔てなしの中には大式女との情事のこととも含まれている事に注目すべきであろう。巻三に入つて、大式女の夫衛門督の目を盗んでの契りの後自邸に歸つた中納言は、

三尺の御几帳、なを絶えず引き隔て給へるを、押しやりて、
近やかにうち添い臥し給ひて、大式女の事は、語り聞こえ
たてまつりにしかば、今宵のうたゝねに、飽かざりつるほど
ゝぎすのころの事など、残る事なく語り聞こえ給て

(巻三・二九六頁)

と、大將大君にこれまで以上に積極的に寄り添いつつ、今しがた経験した後朝の情趣(二九三頁)を話してゐるのである。

このように正妻格の女君に他の女君の事を打ち明けて誠意を示すという中納言の姿勢は、『源氏物語』濡標巻(以下『源氏』と略す)で光源氏が紫の上に明石の上の事を話して御機嫌を取る場面を、男主人公の「誠意の見せ方」の型(パターン)として人物設定語共に踏襲しているとも言えるかもしれない。『浜松』の場合

の「誠意」は、肉體關係を持たない大将大君に、大式女との情事を打ち明けることで正妻格としての優越を示すという意味合いが想定できよう。またそこには、大将大君と隔てのない信頼關係を保つためという意味合いも、勤行を続ける大君の面前で懺悔をするというような仏教的な意味合いも想定し得ると同時に、一方では、大将大君とは肉の交わりを断つた「妙莊嚴の御契り」であつたはずが、大式女よりも容貌の優つてると感じられる(卷二・二九五頁) 大将大君が、「世の常の有様にて待ち受け給はましかば」(卷二・二九七頁)と未練の口説きとも取れる状態に転じ大将大君の氣を惹こうとする要素も想定できよう。同じ平安後期の『狭衣物語』(以下『狭衣』と略す)では、狭衣帝が源氏宮に藤壺女御の事を話しつつ迫る場面も同様の傾向を見せている。

だが、とりわけ『浜松』の特徴として注目すべきなのが、この大式女との情事を中心とする一連の事件を、語り草として享受する傾向なのである。有明の月の下のほととぎすと橘とを背景とした「まさに歌物語の一場面」⁽¹²⁾の雰圍氣を持つ大式女との後朝の別れを寝物語にする中納言は、明石の上の「あはれなりし夕べの煙、言ひし事など、まほならねど、その日のかたち、ほの見し、琴の音のなまめきたりし」(角川文庫本・第三卷・一一二～一二三頁)を紫の上に話す光源氏と同様かもしれないけれどそればかりでなく、この後続く大式女をめぐる事件をも中納言は大将大君に話し聞かせているのである。中納言との密通⁽¹³⁾が夫・母に露見するのを恐れる余り夫からの文に墨を塗り紛らわ⁽¹³⁾しまでする、せっぱ詰ま

つた心情あふれる、後朝の文の返し「そま河の」の歌に対して、心ざしのあればにや、まことに浮かぶ心地して、女君にみせてまつり給て、「中略」えさらぬ仲に、もし漏れきこえば、いとおそろしう便なかるべし。さりとてかくて止みなばあはれなり」(卷三・二九九頁)

と言うように、弁解しながら大将大君にそのまま見せている態度といい、続いての記事大式女が衛門督のもとに引き取られる際に垣間見た「もとの妻」衛門督北の方の零落ぶりをも同じく大将大君に衛門督への非難を込めて話している態度といい、さながら歌物語めいた語り草を扱っているかのようである。⁽¹⁴⁾

そればかりではなく見逃せないのは、対する聞き手大将大君の反応にも、同様の事が言えるのである。後朝の歌の返しを見せられた彼女は、「いとほしとおほいて」大式女が窮地に陥る前に引き取つたらどうかと中納言に勧めているし、衛門督の北の方の零落ぶりを聞かされた際は傍觀者の態度を捨てて、剃髪した我が身に引き付けてはいるものの、中納言と大式女との關係に関しては何の言及もない。もちろん大式女の情趣あるエピソードいわば小話を大将大君を中心とする物語へと組み込むための構想が優先された結果とみることもできよう。だがいづれにせよ結果的には、女の身のふりかたについてを焦点とする物語展開に成り得ても、『源氏』の紫の上の場合のように嫉妬の問題をはじめとする、女の心について問う物語展開とは縁遠いものと考えられる。中納言との仏道に共に励んで育まれた信頼關係が理想的な生活ではあつ

ても、中納言の求めるような男女間の恋慕の情は存在する余地がない。中納言の唐后思慕は大將大君の前であつては別次元の事柄であるといえよう。従つて、④で皇女降嫁の件が起こつた際でも大將大君の反応が、依然我が身のふりかたを憂えることと今の中納言との勤行生活の理想的な状態が失われるのを嘆くことに限られる(巻三・三一六―三二七頁)のは当然と言えるのである。それではその前にある③の帝の場合の言いつくろい(仮にそう呼ぶ)はどのような意味を持つのだろうか。

この唐語りは明らかに公の場のものであつて、既に帰国直後参内し報告している(巻二・二五〇頁)ところを再び帝の「さしもなき事の、ことなくこの世に優りたりと見ゆる事」つまり一般的な事柄について話すよう要請を受け、式部卿官のほかは「近くさぶらふ人もなきほどなれば」いわば密に披露して帝の感嘆を誘っているのである。もちろん、女性の品定めという趣向の点からは「源氏」帯木巻の雨夜の品定めの影響を受けているであろうが、今述べたような作品全体の構想の点からは、「浜松」に「源氏」同様多くの影響を与えた『宇津保物語』(以下『宇津保』と略す)蔵開中巻で、俊蔭の歌日記や文集が帝の要請で仲忠によつて「人には聞かせじとて高くも読まず御前には人も参らせ給はず」(『宇津保物語』本文と索引・本文編)笠間書院、昭和四八年、以下出典を略す、二六八頁)とやはり密に披露され、冒頭の男主人公の渡唐巻(俊蔭巻)が再びクローブアップされるといふ展開と似通つているといえる。

『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考

しかし二作品の物語展開はそれ以外ではほとんど対照的である。『宇津保』の場合は、そもその設定が、蔵開上冒頭において九十の翁の語るころの、近寄る盗人を片っ端から「多くの人取り殺しつる」蔵(二三三頁)や仲忠自らでしか開かない鎖錠(二三四頁)というように、「霊によりて」俊蔭の文集は護られている為、子孫の仲忠自らが読み聞かせ(二六六頁)日記も感動的に披露されており、作品全体からみれば大官の晴れがましい誕生に際して、俊蔭を祖とする従来の「琴の家」の誉れの上に、これも俊蔭の「文章の家」の権威をも加える結果となつている。

だが、それに対して『浜松』の場合、帝の反応は絶えず中納言の思惑から外れていく。河陽県で菊見の唐后を垣間見た場面を話す際に、中納言が女房であるかのようにぼやかしたのに対して「后やありけむ」と質したのは中納言の我が意を得た所であつたろうが、その後も続けて中納言が唐后との宿世の主要な場面を二節で前述したようにバラバラに、けれど「唯一人の御事を心にしみておぼゆるままに」話したのに対しては、「いみじうけうありける事かな。かの国には、女優れたるなるべし。」という程度の感心をしたのみで、すぐ唐の女一般から唐の男一般へと話題を転じている(巻三・三二二頁)。再度「この見給し女房達」実は唐后の比類なき美を思い入れ深く強調したのに対しては、

うちかはるけしきの「限りなふも見とゞめけるかな」と心得させ給につけても、「おぼるけならざりける」とゆかしうめでたうおぼしやられて「なを世にありがたく、めづらかな

る人なりや。かゝる人の世の事をさへわたり行きて見たるよ」と仰せらるるを、

(卷三・三一三頁)

というように、中納言の様子故に「女房達」の真価を認めて感嘆してはいるが、唐語りが終わった後の「まめやかなる事ども仰せらるゝつゝみで」には、

今宵かゝるこまやかなる御物語り、け近ううち乱れ奏したる有様も、なおめでたうおほし召しければ、

(卷三・三一四頁)

ほかならぬ中納言のその思い入れの深さの印象が、帝の降嫁の仰せのきっかけになる結果となつてゐるのである。これは、『源氏』若菜上巻の朱雀院が光源氏への女三宮降嫁をおもいついたそもそのものきっかけが、院が紫の上の養育結婚の実績を口にしていたことであつた過程に比すれば、はるかに単純であるけれども、この箇所からは、中納言の思い入れも帝にとっては、語り手の人となりを評価するための、単なる語り草への思い入れにすぎない事が窺えるように思われる。この帝の反応から推しても、中納言の唐后思慕の過程が、唐帝の〈御妻〉との密通に対する禁忌の下で唐后を語り草として披露する任を果たす代わりに、己の唐后思慕のはげ口にできたために、④の時点では大将大君に話すべきかどうか葛藤を覚える必要はなくなつた成行きとしてとらえられるのである。

以上のように中納言と大将大君・帝との関係を唐后についての言いつくろいの面から検討してきた結果、浮かび上がるのはいず

れの場合でも中納言の思惑とはよそに、唐后の事すらが語り草としか扱われない京の日常生活の様相なのである。そこで、感情的に関わりの無い立場を超えた者——あれ程の思い入れを語り草にしてしまうことのない血縁すなわち〈ゆかり〉が必要とされてくる事情がわかってくるのである。

だが、次にこの〈ゆかり〉のあり方を見極める時、その後の展開——姫君が唐后の〈ゆかり〉として物語の前面に出ながらもその姫君腹に唐后転生が予示される結果となつた過程との関連性が明らかになる。

四

唐后の〈ゆかり〉吉野姫君に対する中納言の感情については、一節で触れたように従来の研究で、唐后の転生の夢告に至る過程が明らかにされつつあるが、かなり複雑なゆれを見せていると言えよう。巻二末の唐后の文の中で初めてこの存在が明らかにされた吉野姫君であるが、巻三に入って中納言の初めての吉野行きに際して、吉野尼君がみた夢告は、中納言こそ姫君の「たづき」だという運命的な内容であつたし、巻三末での吉野姫君との御簾越しの対面では、姫君の「琴にて」の声に触発されて中納言自身の感情も高ぶりをみせており、この時点では中納言と姫君とのハッピーエンドは構想上明らかであるかのようにみえる。しかし巻四に入ると、一転して中納言は、吉野尼君の往生の際姫君の姿を目の当たりにしながらも唐后の代償には成り得ないとして悲嘆に暮

れており、更にはこれに追い打ちを掛けるように、姫君を京に引き取る際に二十歳に達するまでに契りを結ぶと姫君は死に至るとの吉野の聖の予言が周知の通りなされてもいる。その後唐后昇天の空中唱声もあり、京での生活で姫君と親密になるにつれて再び中納言の未練が再燃するうちに、式部卿官によって盗まれるという展開となるわけであるから、このように中納言の意思と関わりなく運命を決定づける構想の枠組みと、中納言自身の感情が入り乱れて進行する状態を明確に位置づけるのは難しい。しかしただ、中納言側の感情がどう変化するのであれ、吉野姫君と中納言との関係そのものについていえば一種の到達点に達しており、その基調は一定しているのではないだろうか。その到達点を示しているのが、既に二節で簡単に触れた巻四での場面——吉野姫君を京に引き取る途中の「中宿り」の夜に中納言が唐后の事を打ち明けてしまう部分だと考えられるのである。

⑤皆うち休みにたれば、いとどかなるに、袖ばかりは引き交はし添ひ臥して、よろづを契りなぐさむるに、いとつつましげにて、はかばかしう言続けたるいらへなどはなけれど、身に近う添ひたるけはひなどの、いとよう物思出でらるゝに、え堪へ給はず、よろづを隔てなく聞こえしらする大将殿の君にだに、一事を深く残し置きて聞こえ出でねと、もろこしの御文にもかすめ書き給めりし若君をも、心得てこの人は見給はんこそよからめ、これにさへ残す心地のせねば、もろこしに思ひ立ちし程の、道のほどのあるさま、かしこに行き着き

『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言とつくり考

ての事も語り出で給ひて、(巻四・三六五―三六一頁)
中納言は、吉野姫君の唐后によく似た「けはひ」に触発されて唐后の事を語り出す。そうして「そのゆかりと思ひわび、尋出でてまつりしなれば、かたみにそのゆかりとおぼせ。」と告げ若君と対面させさらには養育を託し、姫君を「うたた寝の夢のゆかり」として歌を詠みかける。

それは、既に指摘されているように、回想を媒介として唐后の思い出を共有することで何よりも姫君との絆を深めようとする思いが強まったため⁽¹⁸⁾、また唐后の思い出を浄化するため⁽¹⁹⁾、とみる事ができるが、一方ではよく似た「けはひ」の血縁を唐后の思い出を蘇らすために聞き手とした面もあるとみられる。実際、唐土で経てきた唐后との宿世、つまり巻一で繰り広げられた河陽県の菊見をする唐后との出会いから、山陰での一夜の契り、その結果生まれた若君を伴っての帰国に至るまで、唐后との秘事、唐后の類まれなありさまを「せきやる方なく語り続け給ふ」のである。このように、中納言が、帝の御前の唐語りの際の「うちかはるけしき」(巻三・三三三頁)よりもはるかに思い入れの激しい様子で話すのに対して、吉野姫君の方も、たった一人のはらからでありながら一度も会ったことのない唐后に思いをはせ恋しさに感涙し、中納言に共鳴するのである。

思はぬ時なき人の御事を、さし向ひて見たてまつらんやうに語り聞かせ給に、はづかしきもつつましきもうち忘れて、
「この人に逢ひたてまつらざらましかばいかでかはか、ばか

りの御有様も聞かまし」と、空にしめ結ぶ恋しさに、いとどしき涙は一つに流れあひぬるも、かたみにいとあはれになつかし。

(巻四・三六二頁)

中納言と吉野姫君とのこのような関係は、やがて唐后の昇天を告げる空中唱声があった時に改めて強められる。在りし日の唐后の姿を「目の前にみる心地して」回想すればするほど悲嘆に暮れる中納言は、共にいた吉野姫君に、

「みだり心地こそいみじう堪え難けれ。この胸に押しかかり給へ」ときこえ給へば、へ中略かたはらにかき寄せきこえ給て、「よなくもろこしの御事の、つゆもまじろめば、夢に見えつゝ、あやしう心さはぎのみしておぼえつるに、かゝる声をなん今宵聞きつる。いかなる事ぞと思に、いとみみじう」とて泣き給ふに、いらへはせで、顔を引き入れて、涙の落つる気色も、同じ心に、あはれなることかぎりなし。

(巻四・三八〇—三八一頁)

やはり唐后昇天の予兆の夢告を語る中納言に、「同じ心に」共鳴する吉野姫君の組合せである。この後も、

木丁ばかりの隔てにだになく、明け暮れかたはらにて経は読みつつも、おはせし有様、の給ひし事など、尽きせず語り出で給へば、一つ涙に浮かみ給ひて明かし暮し、かつは言ひ慰めへ以下略

(巻四・三八三頁)

と、唐后の千日精進供養のため引き籠っている。この状態は、卷二における大将大君との勤行生活とも似ているが、はつきり異なる

っているのは従来の日常生活から離れたところであるという点である。大将大君に対しては、①の時点で既に仏教上の事柄を言いつくろいに用いていた中納言は、巻四以降は吉野姫君を引き取る際にも吉野尼君の往生を前面に出して言いつくろっているし、この時点に至っては、もはや勤行の言い訳にただ自分が生きて行けそうにない気がするためだと告げているのみなのである(三八一頁)。これに比して吉野姫君には頻繁に「らうたげに」の形容が繰り返され(三六〇・三八〇・三八三頁など)、自分の心に寄り添うように従順な愛らしさにひきつけられる中納言の姿が描かれているのは注目を引く。

以上のように考えていく時、中納言が、唐后の事を日常の中で聞き流される単なる語り草にはすまいとしていると同様に、吉野姫君を従来の日常生活から切り離れたままにしようとしていることが分かるのである。

しかしここで見過ごせないのが、②の中宿りの夜に唐后の事を打ち明けたのは、唐后との隠し子若君を吉野姫君に託するためという事になっている事である。確かに打ち明ける口実にすぎない面も否めないものの、本稿で今まで等閑に付してきたこの若君の問題は実は意外に物語展開全体に深く関わっていると思われるのである。従来の研究において若君については、その将来と巻一の夢告との関係や唐后との母子愛及び中納言との父子愛の主題の脈絡から捉えられてきたが、この際中納言の唐后思慕との関係から注目すべきなのは、二節を振り返ってみると、②の吉野尼君と

の対面の際でも、④の大将大君に皇女降嫁の仰せの件や諸々の事の事を打ち明ける際でも、中納言は唐后の事に触れる都度若君の素姓を曖昧に話しているのである。ここで改めて中納言帰国後の若君の動向を追ってみよう。

五

卷二に入って九州に到着した中納言は若君の常ならぬ成長ぶりに、

かつはゆゝしうおぼして「かく外の世に生まれたる人と知られては、行くさきこの世に少し隔たるやうそはん。後の聞こえはありとも、なおいかで外よりいてわたりたるとは、人に知られじ」
(卷二・二一七頁)

と考えて中納言母に頼んで自分の乳母である中将の乳母を九州に呼び寄せて若君を預けている。この際には、

若君の御事を忍びていと後の御腹とこそ露はかひ給はねど、「かの国にありしほど、思よるまじきあたりにかゝる人の出でたりしを見捨てんもいとあはれにて、へ以下略」
(卷二・二二三頁)

母親の出自が高貴な人である事と、その母親が若君を手放すのに迷い悩んだ経緯とを匂わせるにとどめている。この時点での中納言は単に若君の外の世の生まれであることを隠すため中納言母に預けるつもりでいたのだが、留守中の大将大君の出産剃髪を報を聞いた後では、自責の念に駆られて、その娘ご姫君を既に中納

言母が養育していること、出家した大将大君の心痛を思いやるべきことから、故讃岐守の妻である中将の乳母の里で養育させることとなる(卷二・二二四〜二二六・二四〇頁)。帰京した後中納言母には、久しぶりに再会した際、

若君の御事をも、いとしのびて「心より外にはさる物見出でてまうで来しを、しばし人に知らせじとて中将には、かしくにてあづけ侍りしなり」
(卷二・二四二頁)

と説明し、今晚対面したいと願う母に対して、「人にも知らせじと思ひてなん。今は心のどかに御覧じてん」という理由で対面を引き延ばしている。結局、中納言母と若君との対面が可能になるのは、大将大君との勤行の生活が軌道に乗ってからである。その際も、ちご姫君と共に手元で養育したいという中納言の願いに対しては、再度「猶人に知らせじ」という考えから「なを思ふやうありて」中将の乳母のもとにとどめ置いている(卷二・二五六頁)。この直後に、唐后の文を開ける端緒となった、大将大君に唐后の事を話すのをためらう①の記述があり、関連性が考えられるのである。

この後卷三に入っては、二節で述べたように吉野尼君に対しては対面すらも引き延ばしたままにし、大将大君に対しては対面させるものの、何のわだかまりもない大将大君の、若君を養育したいとの願いを「しばし人しげう見せじと思侍なり」というだけでなく、またもや引き延ばし対面させるのみにとめているのである(卷三・二五七頁)。

卷四の⑥で、吉野姫君に対して本当の素姓を明かした上で養育を託するに至るまでの経緯にこのような紆余曲折があったことを考えるならば、隠し子とはいえ中納言の唯一の息子若君を正式に託す行為からしてやがてはその託した相手に大将大君や中納言母と並ぶ社会的な立場が与えられるといった成行きを想定してもおかしくないのではないだろうか。ましてや吉野姫君の場合、中納言は「この人を御前に譲り聞こえさせつるぞ」と言い若君に対しても「これぞ母よ」と言つて引き合わせ(巻四・三六三―三六四頁)、若君自身もそれ以後はひたすら吉野姫君を母と慕つて離れない状態にまでなっている(巻四・三六四・三七二・三八八頁)ので、なおさらであろう。中納言としては唐后のゆかり同士の結び付きによつて唐后のよすがを強くしたという見方ができるだろう。しかし既に考察されているように、吉野姫君と若君のいる中将の乳母の里は「吉野わたり」として大将大君とその家族の方と同等の比重がおかれるような物語展開になっているし、実際登場人物の側からも巻四末になつて清水籠りの吉野姫君を垣間見た式部卿宮は、

若君の「母」など呼びむつれ給を、「いみじういまだあやかなりと見ゆれど、子など有りけるは、今始めたる中にははらざりけり」と心得給ふに、「若君かばかり大人ぶるまで忍び隠ろへて、人知れぬさまなるは、異事ならじ、大将の女君にはゞかり聞てゆるならんかし。(以下略)」(巻四・三八八頁)という当然のごとくの判断をしており、結局吉野姫君を盗み出し

た後でも、同様の疑いを持ったあげく姫君の素姓を不思議に思っているのである(巻五・四〇六頁)。最終的にはこの疑いは、表沙汰にはならず、うやむやになるが、それは、次の五節で検討する通り、吉野姫君の素姓が貴族社会で受け入れられるような、しかるべき内容で公表されたからであつて、若君の処遇が日常生活に及ぼす影響力は否めないのである。

もともと物語展開の構想については、従来いわゆる「大将大君(を中心とした)物語」から「吉野姫君(を中心とした)物語」への移行の過程が検討されてきたが、単に大将大君から吉野姫君へというだけでなく、本稿でこれまで触れ得なかつた吉野尼君についても視野の中に収めるならば、吉野姫君をクローズアップするための伏線は既に巻二末の唐后の文が開けられた時点で見出されよう。同じ唐后のゆかりであつても、「思ひ棄つまじき人」として若君の事が触れられ「なつかしうおぼせ」と頼んでいるのは、実は吉野尼君宛の文ではなく吉野姫君宛の方であつた(巻二・二六一頁)。これは、吉野尼君には若君の本当の素姓を明かさなかつた中納言が、先ほど引用した⑥において吉野姫君に話す動機「もろこしの御文にもかすめ書き給ふゆりし若君をも、心得てこの人は見給はんこそよからめ」とそのまま対応するのである。²³⁾以上のように考察した時、一方では中納言が吉野姫君を従来の日常生活の婚外の存在である唐后の「ゆかり」として扱っているが故に唐后の事を隠す事なく話している事、しかしまた一方では、その思惑とは裏腹に「ゆかり」だからこそ唐后との本当の事を話

すと同時に託された若君故に、吉野姫君はその日常生活の中の關係に巻き込まれてしまう事——このような中納言の思惑と物語展開との絡み合いの必然性を確認できたのではないか。

近年中納言自身の感情の傾向——遠く離れたもの・手に届かないものへひたすら憧憬を寄せる反面で、一旦手に入れたもの・手に入れ易いもの・近くにあるもの・日常化されたものには興味を失う傾向——が、作品全体にわたって指摘されている。つまりはこの男主人公の傾向と、京の日常生活における人間関係との間で引き起こされる葛藤を顕著に表している一端が、この唐后をめぐる言いつくろいとそれにまつわる若君の処遇という面ではないかと思われるのである。

六

『浜松』においては、これまで考察してきた過程にとどまらず、結末部分巻五に至っても、唐后をめぐる中納言の言いつくろいは止まない。盗みだした吉野姫君の衰弱に困り果てて中納言の手に戻す際、式部卿宮はしきりに姫君の「本体」を知りたがる。姫君の「本体」つまり素姓とは、とりもなおさず、巻一・巻二で物語展開の前面に押し出されてきた異父姉唐后（及び吉野尼君）の「本体」でもある。中納言は、既に唐后転生の夢告を受けており、式部卿宮の手中に落ちた吉野姫君との契りの可能性を確保するよりは、むしろ唐后そのものの転生を待ち望む方に傾いたため言いつくろうことに決めたと理解されよう。それにしても、この最後

の言いつくろいは（これ迄にも三の御子・吉野尼君——孝養を尽くした相手の名を口実に使ったにせよ）その度合が甚だしい。

「唐の親王のこの世の事をかぐみを見んやうにの給ひし中に、『上野のみこと言ひし人のむすめにいみじう忍びて行き通ふやうありしほどに、はかなう形見とぞめてき。女にてぞあらん。いとけなきほどをあはれと見し程に我をうらむる心ありて、行方も知らず、母君隠れにしかば、今一たび見ずなりにしを、身をかえて後、世にもあはれに心苦しうおぼゆるを、我を忘れず、哀と思はば、かの人をたづねて、世にだにあらば、必ず尋て知れ』となん侍りしかば、まかり帰りたづね侍りしかば、（以下略）」（巻五・四一六―四一七頁）

つまり、あれほど唐在では父宮転生の事実を秘していた（巻一・一五七・一六五―一六六頁）のにもかかわらず、危険を犯してはるばる唐土まで渡って父宮の転生三の御子と再会を果たした事と、唐后の父三の大臣と吉野の聖からそれぞれ聞いた（巻一・一九〇―一九一頁、巻三・二六六―二六八頁）、唐后・吉野尼君の「本体」の話の逆手にとって、その父宮が前世日本で吉野尼君のもとに通って生じた娘が吉野姫君であると言い逃れているのである。²⁶中納言のこのような姿勢には、唐后転生に実現させた暁にその転生の事実を独り占めし日常生活の人間関係から切り離しておくためには、敬愛する父宮の転生の事実を勝手に作りかえて物語りしてでも唐后の「本体」をひたすら秘して周回を欺き通そうとする決意（極端に言うならば）が見られるのではないだろうか。この

ように、唐後の事を秘して語らない中納言の姿勢は、結末にまで及んでおり、唐后思慕の主題にきわめて密接な『浜松』の作品全体のあり方に関わる特質である。それは三節で考察したように大將大君に対しては唐后関係以外の出来事なら、皆一様に各々の事件が起こった直後に自分のやむを得ない窮状を隔てなく打ち明け事を収めるといふ傾向が物語展開全体に及んでいるからこそ、かえって唐後の事に思い入れが深められ至高の存在として見なされ続けるという成行きにあるといえよう。

それでは、『浜松』の作品全体の特質として、秘して語らない男主人公のこの傾向はどのように評価されるであろうか。中納言の唐后への人知れず秘めた恋は周知の通り『源氏』の影響——光源氏の藤壺への恋を下敷きにしている「いはでしのぶ恋」の一種といえるが、これほどまでに物語全体にわたって、周囲に對し秘して語らないでい続けようとする物語展開は、例をみないであらう。確かに『狭衣』の狭衣も源氏宮への思いを周囲には伏せておいたりあるいは飛鳥井の女君の事を源氏宮への聞こえを恐れて伏せておいたり、その時々が必要に應じた言いつくろいも行っているが、『浜松』の中納言はと言いつくろうこと自体を行動の主眼においてはいいない。それより後の「とりかえばや」にしてもあくまでも二人の異装の事実を隠し通すため周囲を欺く方策が多彩に繰り広げられて行く物語展開と言えるのである。この『浜松』に特徴的な言いつくろいをも辞さない「いはでしのぶ恋」を強調する発想は、例えば平安朝の私家集の中の、「人に語るな」「人に

知られじ」の類型表現をもつ歌などによく表れていると思える。これらの歌はそのほとんどが恋の歌であり、しかもそうした作者のほとんどが女であることも注目される。特に「人に語るな」の句の歌などからは、全てが語り草となり得る宮廷生活の中では、ただ言わずにおいてしまうのでは足らず、積極的な口止めを相手に強いて、二人の絆を固めようとする様子が窺い得るのである。しかし今の段階では調査の範囲が小さいため、なお再考を要する。

ここではただ、『浜松』の中納言の周囲に對して秘して語らない姿勢というのは、おそらくは当時の物語の作り手・受け手である女房層の理想とする、男主人公の傾向と見なされようが、それ以上に、かけがえない事柄をあくまでも秘して語らず守り通したいという、女房達自身が根強く持ち続けている願望をそのまま反映したのではないかという見解を示して、稿を終えることにする。

〔注〕

- (1) 松本弘子氏「『浜松』の構想に関する一試論」(国文26、昭和42・1)、横山猶子氏「『浜松中納言物語』に於ける尼姫物語」巻四ついたちの日の意義について——(実践国文学28、昭和60・10)。
 (2) 神田龍身氏「『浜松中納言物語』幻視行——憧憬のゆくえ」(文芸と批評5(5)、昭和62・9)、野口元大氏「『浜松中納言論』女性遍歴と憧憬の間——」(上智大学国文学科紀要6、平成元・1)、同氏「『浜松中納言論(承前)——女性遍歴と憧憬の間——」(上智大学

国文学科紀要7、平成2・11。

(3) 『浜松中納言物語』巻三考——(御前での唐語り)のエピソードと中納言の唐后思慕の特質——(日本文芸学27、平成2・11)。

(4) 以下の引用の本文は、松尾聡氏校注『浜松中納言物語』日本古典文学大系77(岩波書店、昭和39)により巻次と頁数を付した。

(5) 久下晴康氏「唐后の転生への道——持続する菊の心象」(日本文学25(5)、昭和51・1)、神田龍身氏「『浜松中納言物語』幻視行」(注(2)前出論文)。

(6) 野口元大氏「浜松中納言論」(注(2)前出論文)。

(7) 久下晴康氏「唐后の転生への道」(注(5)前出論文)。

(8) 同上。

(9) 小田切文洋氏「『浜松中納言物語』覚書——「月」をめぐる——」(研究年報へ日本大学短期大学部)1、平成元・2)。

(10) 拙稿「『浜松中納言物語』巻三考」(注(3)前出論文)。

(11) 皇女降嫁辞退のものについては、伊藤守幸氏「『浜松中納言物語』の反中心性」(文芸研究97、昭和56・5)、西本寮子氏「『浜松中納言物語』における皇女降嫁」(国文学叢刊116、昭和62・12)、日本女子大ゼミ「『浜松中納言物語』の本質——盈満の中の欠落——」(研究ノートへ日本女子大学)9、昭和56)の論考において、『源氏』若菜上巻・宿木巻と比較されて位置づけられている。

(12) 野口元大氏「『浜松中納言論』61頁」(注(2)前出論文)。

(13) 三角洋一氏「御津の浜松」私注(平安文学研究、昭和53・1)の解釈に基づく。中納言からの文と考える松尾聡氏(日本古典文学大系頭注)の解釈もある。

(14) 野口元大氏「『浜松中納言論』」(注(2)前出論文)では、「(愛情に

『浜松中納言物語』唐后をめぐる中納言の言いつくろい考

よってのみ結ばれた関係の)そのはかなさへの不安は、中納言にも理解できないわけではなかったが、彼にとっては、その現実から切り離されたはかなさに生きる女の姿ほど心をそそるものはないのである。」(65頁)と論じている。

(15) 未央宮の別れの宴の際の唐后の翠の形容として用いられている倭薩女の翠については中野幸一氏「うつほ物語の影響」(『宇津保物語新攷』昭和41・1)が、物語展開の導入部に共通している男主人公の渡唐のモチーフについては伊藤守幸氏「『浜松中納言物語』の反中心性」(注(11)前出論文)が、構想共どもの『宇津保』の「浜松」への影響を考察している。

(16) この点に関しては、三田村雅子氏の御教示をいただいた。

(17) 拙稿「『浜松中納言物語』巻三考」(注(3)前出論文)。

(18) 野口元大氏「『浜松中納言論(承前)』」(注(2)前出論文)。

(19) 小田切文洋氏「『浜松中納言物語』覚書」(注(9)前出論文)。そのほか二人の思惑のすれ違いを指摘する神田龍身氏「『浜松中納言物語』幻視行」(注(2)前出論文)もある。

(20) 野口元大氏「『浜松中納言論(承前)』」(注(2)前出論文)。

(21) 久下晴康氏「唐后の転生への道」(注(5)前出論文)、鈴木紀子氏「『浜松中納言物語』——親子愛に見る特性——」(橋女子大学研究紀要14、昭和62・12)、神田龍身氏「鎌倉時代物語序説——仮装、もしくは父子の物語——」(日本文学35(12)、昭和61・12)、寺田透氏「『浜松中納言物語』」(平安時代の物語、福武書店、平成2)。

(22) 横山猶子氏「『浜松中納言物語』に於ける「厄姫君物語」」(注(1)前出論文)。

(23) 吉野尼君もまた唐后を思い起こさせるゆかりであるにもかかわら

ず、成仏を妨げる吉野姫君の行く末の心配を中納言に話す人物としてかかれていますので、若君の養育者には向かないといえる。

(24) そのほかにも、中将の乳母とその妹親子がそれぞれ若君と吉野姫君の後見として設定されているという構想上の布石もあげられる。

(25) 神田龍身氏「『浜松中納言物語』幻視行」(注(2)前出論文)、野口元大氏「浜松中納言(承前)」(注(2)前出論文)。

(26) 伊井春樹氏「浜松中納言物語の方法——唐后から吉野姫君へ——」(国文学研究資料館紀要、昭和53・3)。

(27) 例えば「人に語るな」の歌の場合、『新編国歌大観 第三卷・私家集編I』全13首中9首が後朝の歌であり1首を除いて皆女性の作である。これらの歌は、「ゆめとも(語るな)」と「夢」(男女の契り)との同音語を重ねて用いてある技巧などから、その多くがかなりの強調の語気のリズムを持っているように思われる。

(まじうら・あゆみ 本学大学院博士課程)